

沈 昌燮(シム・チャンソプ)氏

(Shim chang sup)

を迎えての、日韓親善写真家交流事業

写真展《浮遊の光景》企画

主 旨 鳥取県と韓国江原道は久しく国際交流を続けています。特に、鳥取県文化団体連合会は江原道芸術総連合会との文化交流が盛んで、今日まで続けてきています。そんな中で、江原道芸総のチェ・ジスン氏・シム・サンマン氏・パク・クアンリン氏に続き、**シム・チャンソプ**氏をお招きし、氏の写真作品を国際交流展として鳥取県倉吉市に於いて開催することになりました。それに付随して、県内の写真作家との交流親善を図りたいと交流研修会も開催いたします。

また、主催する倉吉文化団体協議会は、県文連市町村分野に加入しており、今回独自に事業展開するものです。

主 催 倉吉文化団体協議会

後 援 倉吉市・倉吉市教員委員会・鳥取県中部地区日韓親善協会・鳥取県文化団体連合会・鳥取県写真家協会・中部地区各写真団体・マスコミ各社等へ申請予定

助成申請 公益財団法人鳥取県国際交流財団(申請中)

開催期日 展覧会期間 **2017年9月1日(金)～9月29日(金)**

交流会期日 **2017年9月1日(金)～9月 5日(火)**

展覧会場 倉吉市文化活動センター リフレギャラリー

〒682-0817 鳥取県倉吉市住吉町 77-1 0858-23-6095

交流会場 倉吉市文化活動センター1F 第一活動室

通 訊 鈴木京花 TEL 090-6437-4980 e-mail:kyokaclub@gmail.com

受け入れ 倉吉文化団体協議会 計羽孝之 e-mail:figarofigaro@do4.enjoy.ne.jp

担当者TEL090-1361-7574

約 束 事 ①会期は29日間とする。写真展に関わる経費(写真のプリント、額装経費等)は主催者で負担。

②鳥取県内写真作家との交流親善写真研修会の開催(2017.9.3)

パネルディスカッションの開催

パネラーの想定/シム・チャンソプ氏(江原道写真家協会)・福島多暉夫氏(米子市写真家協会)・川崎俊行(赤いくつ主宰・倉吉市展審査員)・Ringen(林原滋/フリー)。

基調提案/コーディネーター/計羽孝之

③作家が倉吉市を訪問する場合は、渡航旅費は本人負担とする。滞在費等は主催者で負担する。随行者の滞在費は受益者負担とする。また、その期間は下記の日程とする。

往路【米子空港利用】(歓送迎は倉吉文化団体協議会で担当)

2017.9.1(金) 09:30 ソウル発⇒11:00 米子空港着⇒大山国立公園・植田正治写真美術館見学⇒18:30 夕食会(倉吉シティホテルないふじ蔵)⇒倉吉シティホテル泊

9.2(土) 10:00 倉吉市展見学⇒交流撮影会⇒鳥取砂丘(昼食)⇒池本写真美術館見学⇒18:30(未定)夕食(未定)⇒倉吉シティホテル泊

9.3(日) 11:50 昼食(白壁倶楽部)

13:00 写真展ギャラリートーク

13:30 歓迎ミニコンサート(出演/鳥取オペラ協会ソリスト)

ソプラノ/村田江里 ピアノ/稲毛麻紀

14:00 沈 昌燮氏を迎えての交流親善写真研修会

「風景写真の現在」パネルディスカッションの開催

(会場/倉吉市文化活動センター1F 第1活動室)

- 18:30 懇親会(日本料理「飛鳥」) ⇒みささ桃園館泊
9.4(月) 10:00 交流撮影会⇒三徳山三仏寺⇒12:30 昼食(谷川天狗堂)⇒14:30 琴浦町「塩谷定好写真資料館」訪問
17:00 倉吉市表敬訪問⇒18:30 夕食(みささ桃園館)泊
9.5(火) 09:00 三朝発⇒イオン日吉津店⇒昼食⇒空港
15:00 米子空港発便(OZ163便)で帰国

その他 展示について/ギャラリストの指示に従って倉吉文化団体協議会事務局にて額装、展示する。

招待作家「沈 昌燮(シム・チャンソプ)氏」プロフィール

1949年生まれ。春川市出身。地方公務員を定年退職(春川市庁2006)し、2010、春川文化財団入居作家。2011地域名誉教師<文化財とともにする写真教室>を運営、文化体育部。韓国文人協会会員、江原道文人協会理事、春川文人協会会長(現在)。テーマ写真研究会代表(現在)。韓国随筆新人賞受賞(2006)・春川文学賞受賞(2014)
2013 photo essay <たまには懐かしさがなつかしい“> 発刊
2012 江原代表カメラマン選定公募 5人選定, 英越東江国際写真展示
2011 江原道カメラマン 5人招待展, 文芸会館展示室、英越
2010 個展「浮遊の風景」、アートプラザギャラリー、春川
2006 江原カメラマン令書地域招待展, 写真博物館, 英越
2007 「春川の道」招待展, ギャラリー松, 春川
1996 春川首府 100周年招待展, 文芸会館ショールーム, 春川
1992 江原のカメラマン招待展, 文化芸術会館, 春川
1985~ テーマ写真 4人展, 春川, 横城

作家のコメント

写真で故郷の詩を書く

パステル画のような風景を、固執している霧の中で、何かの形象たちが鬼ごっこを繰り返している。見えては消え、消えては浮び上がる光景。

今回の展示作品のモチーフは、二つの水流が駆け寄り、一つに合流する湖周辺の抒情的で感性を刺激する光景だ。湖畔の都市。霧の都市と呼ばれる私の故郷「春川」。大きな水門を開けば、向い合う水流は血管のように私を支え育ててくれるエネルギーだった。

光景に対する創作性とその意図は感じさせず、アンセル・アダムス風の荘厳な風景でもない。湖、風、そして霧が演出する湖畔の淡いハーモニーを、詩人の感性とカメラマンの視覚でイメージ化しようとした。

しかし、どうして自然の変化を、平面の印画紙に移すことができようか? 長年の勘を通じて向い合ったアナログ的風景だ。久しい時間を、写真と共に暮らした私の写真世界は、常に霧の中だった。私はくるみの皮よりも堅く意識をくるんでいた障壁を、一気に崩して見ようとしたが、その認識は思ったより堅かった。習慣的に培った表現力と、その感性を仕方なく受け止めざるをえなかった。私だけの感性で、自然の行間に隠れているポエジーを捜す…。湖水があって、霧がある故郷を私は愛している。たまには、見晴らしの良いカフェに座って、コーヒーの香りと共に湖を眺めると幸せに包まれる。

今日も水面は、風をその身に受けて水をかき分けて舞上がる水鳥のシルエットが、空間を満たす瞬間、ふっと浮び上がった詩情にシャッターを切る。確かに鋭い時代精神で推敲しながら、悩みながら作った作品ではないが、平凡な風景を隠喩的言語で表現しようとした。リアリティーのある風景ではなく、特に静謐な世界を感じた。これは私の思惟の産物だと言いたかったのだ。私は、挑戦と実験で自分の芸術世界の中に入って行こうとするのだと、一つの過程だとお粗末な言い訳をしているのです。